

CONTENTS

●年次報告書の刊行にあたって	2
■特別講義・講演会	
「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」	6
「近世新吉原遊廓の実像と現代」	12
■上映会	
「ドキュメンタリー映画『トークバック 沈黙を破る女たち』——ジェンダー研究と表 現実践への挑戦」	18
■研究プロジェクト	
A「企業のダイバーシティ推進の実態調査」	24
B「スポーツ科学をめぐるジェンダー問題の検討」	26
■業績一覧・2025年度	
ジェンダーセンター運営委員業績一覧	27
●ジェンダーセンター運営委員一覧	30
●ジェンダーセンター運営委員会会議録	31
●ジェンダーセンター活動記録（15周年記念巻末付録）	33
●編集後記	47

年次報告書の刊行にあたって

2025年度は、日本社会においてジェンダー平等および多様性をめぐる制度的枠組みが一段と整備され、これまで理念として語られてきた取り組みが、具体的な指標や実践として可視化され始めた一年でした。企業においては、人的資本情報の開示の流れが強まり、女性管理職比率や男性育児休業取得率の公表が実質化するなど、多様性を「理念」ではなく「戦略的資源」として位置づける動きが広がりました。また、性暴力・ハラスメント防止や、LGBTQ+を含む性的マイノリティの権利保障をめぐる議論も活性化し、自治体レベルでは条例制定や支援策の多様化が進むなど、包摂的な社会の実現に向けた政策的対応が具体化した一年であったといえます。

国際的にも、賃金格差是正やケア労働の再評価、AIによるジェンダーバイアスの検証と是正といった課題が、研究・政策双方の重要なテーマとして位置づけられました。ジェンダーや多様性は、経済、技術、文化を横断する社会的基盤として捉え直されつつあります。文化・社会の領域においても、多様な性に対する価値観を題材としたコンテンツが数多く生み出され、メディア表現の刷新が進みました。教育現場においても、固定的な性別役割への気づきを促す実践が広がり、若年層を中心に「らしさ」に縛られない価値観が着実に浸透しつつあり、本学に学ぶ学生諸子においても、同様の変化を見て取ることができました。

こうした社会的変化を背景に、本センターでは2025年度も、経済・歴史・文化・表現といった多様な切り口からジェンダーと向き合う、学術的かつ実践的な場を創出してまいりました。

10月には、特別講演会「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を開催し、企業経営の第一線で活躍される登壇者をお迎えしました。本講演会では、ダイバーシティ推進が経営戦略や組織変革にどのように結びついているのかについて、具体的な事例を交えながら議論が行われました。人的資本経営が重視される時代において、ジェンダー平等や多様性が企業価値創造の中核となり得ることを示す内容は、学生や研究者のみならず、実務に携わる参加者にとっても示唆に富む機会となりました。

続いて11月には、「近世新吉原遊廓の実像と現代」と題した特別講演会を開催し、歴史研究の視点から、ジェンダーと権力、労働、身体をめぐる問題について再考しました。近世社会における制度や慣習を丁寧に読み解くことは、現代社会においてなお残る構造的課題を相対化し、歴史と現在を架橋する知的営みとして大きな意義を有しています。江戸時代を舞台に、身分や性の枠を超えて生きた人々の姿を描いた『べらぼう』が今期のNHK大河ドラマとして放映されていたこともあり、本講演会は高い関心を集め、きわめてタイムリーな開催となりました。



さらに12月には、ドキュメンタリー映画『トークバック 沈黙を破る女たち』の上映会を開催しました。本企画では、性暴力の被害当事者が声を上げることの意味と、その表現が社会に与える影響について、ジェンダー研究と映像表現の両面から考察する場を設けました。研究と表現、個人の経験と社会構造を結びつけ、沈黙を強いられてきた声に耳を傾けることの重要性を改めて問いかける機会となりました。

また、今年度は、センター運営組織のメンバーに交代がありました。学部事務スタッフとして長年ご尽力いただいた服部さんから鈴木さんへとバトンタッチが行われ、専門事務スタッフの臺さんとともに、引き続き強力なサポートをいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

また、センターの活動にご関心をお寄せいただき、各種イベントにご参加くださった皆様にも、厚く御礼申し上げます。本センターは今後も、学際的かつ対話的な取り組みを通じて、ジェンダーと多様性をめぐる課題を社会と共有し、知と実践の往還を促進する拠点であり続けたいと考えております。

2025年度に積み重ねられた議論と学びが、次年度以降のさらなる研究・教育・社会連携へとつながることを期待するとともに、今後とも本センターの活動に対し、皆様の変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

2026年3月1日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長

牛尾奈緒美

 **特別講義・講演会**

特別講義

企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント

【登壇者】

翁 百合氏（（株）日本総合研究所 シニアフェロー）

【略歴】日本銀行入行後日本総合研究所に移り、主席研究員などを経て2018年から25年6月まで理事長を務める。同年7月より現職。

エコノミストとして金融システム、社会保障、経済政策について分析、中長期視点から提言を続けている。現在慶應義塾大学特別招聘教授も兼任。産業再生機構産業再生委員、規制改革会議委員、「選択する未来2.0」懇談会座長、内閣官房「新しい資本主義実現会議」構成員などの政府委員も歴任、23年より政府税制調査会長。著書に『金融危機とブルードレンス政策』（日本経済新聞出版社）など。第一回日本経済新聞社 円城寺次郎記念賞受賞（2006年）。

後藤佐恵子氏（はごろもフーズ株式会社 代表取締役社長）

【略歴】スタンフォード大学経営大学院修士課程修了。味の素、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インク・ジャパンを経て、2004年にはごろもフーズ入社。サービス本部長、経営企画本部長などと歴任し、2019年10月に代表取締役社長に就任。

2031年の創業100年に向けて“キッチンで最も愛されるブランドの確立”のため、お客様ニーズに応える新製品の開発に注力。自身の経験からワークライフバランスの推進に取り組み、「時差出勤」や「時間単位の有給休暇取得」などの制度を導入。従業員エンゲージメントを高め、社員全員にとって働きがいのある会社をめざす。

【主催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2025年10月20日（月）15：20～17：00

【会場】明治大学駿河台キャンパス リバティタワー 1156 教室

【ファシリテーター】牛尾奈緒美（情報コミュニケーション学部教授、ジェンダーセンター長）

【来場者数】75名

報告：牛尾 奈緒美

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターは、2025年10月20日、駿河台キャンパス・リバティタワー1156教室にて、特別講演会「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を開催した。本企画は、人種・性別・性的指向・障がい・年齢・価値観・経験など、多様な個性を尊重し、それを組織の力として活かす「ダイバーシティ・マネジメント」をテーマに、企業経営者や専門家を招いて議論を深めるシリーズであり、今回で8回目となる。

本会には、株式会社日本総合研究所シニアフェローの翁百合氏、はごろもフーズ株式会社代表取締役社長の後藤佐恵子氏の2名をゲストとして迎えた。両氏による講演に続き、ジェンダーセンター教員を交えたディスカッション、そして参加学生との質疑応答が行われ、多様な視点から日本社会におけるダイバーシティ推進の現状と今後の課題が語られた。

まず翁氏は、日本銀行勤務を経て長年エコノミストとして活躍してきた立場から、日本が直面する人口減少および労働力不足の構造的問題を提示した。特に、生産年齢人口の減少が避けられない状況下で、付加価値生産性をいかに維持・向上させるかが重要であると指摘。そのためには「人材への投資」が不可欠であり、「人件費はコストではなく投資である」と強調した。また、税制により配偶者の年収上限に働き方を合わせる現状、長時間労働文化、育児期のキャリア中断など、日本社会に根強く残る制度的・慣習的な要因が、女性の能力発揮を妨げていると指摘。女性の教育水準が高いにもかかわらず十分な活躍に結びついていない現状は、日本の大きな「潜在力の損失」であり、社会保障制度を含む抜本的な改革が必要であると述べた。

続いて後藤氏は、2019年に同社初の女性社長として就任した自身の経験を踏まえ、企業内部から見たダイバーシティ推進の実践について語った。はごろもフーズでは、女性社員のキャリア形成を支援する女性リーダー研修や、管理職候補層を育成するHG職制度の導入、男性の育児参加を促す制度整備など、具体的な取り組みを継続してきたという。特に、社員による「育児休業体験談の掲示」は、制度の理解促進だけでなく、職場全体の意識改革を促す効果があると述べた。「男女関係なく個人としての視点や働き方を尊重することが大切」「百点を目指さず六十点でもよい」「仕事を辞めないことに意味がある」という言葉には、働く人々への現実的かつ温かいメッセージが込められ、会場の共感を呼んだ。

質疑応答では、学生から「女性が新卒から望むキャリアを築くために必要なこと」「教育制度はどのように変わるべきか」など、多様な質問が寄せられた。後藤氏は「男性の意識が変わらなければ社会は変わらない」と述べ、企業のみならず社会全体で価値観をアップデートする必要性を強調した。参加者からは、実務経験に基づいた具体的な助言に勇気づけられたという声が多く聞かれた。

ある参加者は、今回の講演を通じて日本のダイバーシティ推進の現状と課題を再認識したと感想を述べていた。女性の働き方を制限する構造、長時間労働文化、育児期のキャリア中断など、社会制度の見直しの重要性に加え、企業ができる具体的なアクションを学ぶ機会になったという。また、社会のトップで活躍する女性の存在は、学生自身の将来への励ましにもなったと語り、「これからは自分も社会の変化を担う一員として、より主体的にキャリア形成に向き合いたい」と述べる者もいた。

本講演会は、多様性尊重の理念を社会に広く浸透させるために、制度と文化の両面からアプローチする重要性を改めて示す機会となった。今後も学生と社会をつなぐ学びの場として、ダイバーシティに関する講演・研究活動を継続的に展開していきたい。



講演する翁氏



講演する後藤氏



牛尾ゼミ一同と、
(前列左から) 翁氏、牛尾教授、後藤氏

企業トップの考える ダイバーシティ・マネジメント

10/20 (月)

15:00開場 15:20開講

明治大学 駿河台キャンパス
リバティタワー 15階
1156 教室

ファシリテーター：牛尾奈緒美氏
(情報コミュニケーション学部教授)

どなたでも参加無料・事前登録制
URLまたはQRコードから
お申込みください



<https://forms.office.com/r/gRW1pnGJ5y>



牛尾 奈緒美氏
情報コミュニケーション学部教授
ジェンダーセンター長

慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程修了。1998年明治大学専任講師就任。2003年助教授、2009年より教授。2016年～20年明治大学副学長。専門は経営学、人的資源管理論、企業における人材活用問題をジェンダーの視点から分析。著書『女性リーダーを育てるしくみ』（中央経済社）『ラーニング・リーダーシップ入門』（日本経済新聞出版社）ほか多数。



翁 百合氏
(株)日本総合研究所 シニアフェロー

日本銀行入行後日本総合研究所に移り、主席研究員などを経て2018年から25年6月まで理事長を務める。同年7月より現職。エコノミストとして金融システム、社会保障、経済政策について分析、中長期視点から提言を続けている。現在慶應義塾大学特別招聘教授も兼任。産業再生機構産業再生委員、規制改革会議委員、「選択する未来 2.0」懇談会座長、内閣官房「新しい資本主義実現会議」構成員などの政府委員も歴任、23年より政府税制調査会長。著書に『金融危機とブルーデンス政策』（日本経済新聞出版社）など。第一回日本経済新聞社円城寺次郎記念賞受賞（2006年）。



後藤 佐恵子氏
はごろもフーズ株式会社代表取締役社長

スタンフォード大学経営大学院修士課程修了。味の素、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インク・ジャパンを経て、2004年にはごろもフーズ入社。サービス本部長、経営企画本部長などと歴任し、2019年10月に代表取締役社長に就任。2031年の創業100年に向けて“キッチンで最も愛されるブランドの確立”のため、お客様ニーズに応える新製品の開発に注力。自身の経験からワークライフバランスの推進に取り組み、「時差出勤」や「時間単位の有給休暇取得」などの制度を導入。従業員エンゲージメントを高め、社員全員にとって働きがいのある会社をめざす。

タイムスケジュール

15:20	開会挨拶
15:22	学生によるプレゼン・翁氏講演会
15:50	学生によるプレゼン・後藤氏講演会
16:18	ディスカッション 質疑応答
17:00	閉会

※終了時間は前後する可能性があります。

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
問い合わせ先 gender@meiji.ac.jp

特別講義

近世新吉原遊廓の実像と現代

【登壇者】

横山百合子氏（国立歴史民族博物館名誉教授、明治大学文学部ほか兼任講師）

【略歴】 東京都生まれ。フランス社会科学高等研究院客員教授（2024年3月）。東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程修了。博士（文学）。専門は日本近世史、ジェンダー史。著書に『明治維新と近世身分制の解体』（山川出版社、2005年）、『江戸東京の明治維新』（岩波書店、2018年）、「遊女の「日記」を読む：嘉永二年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件をめぐる」（長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』岩波書店、2020年）他、共著・論文多数。2020年10～12月開催の国立歴史民俗博物館企画展「性差（ジェンダー）の日本史」では展示代表を務め、同企画展には2万人以上が訪れた。

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2025年11月17日（月）18：00～20：00

【会場】 明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール

【コーディネーター】 水戸部由枝（政治経済学部教授）
高峰 修（政治経済学部教授）

【来場者数】 70名

報 告：水戸部 由枝

横山百合子氏が展示代表を務め、2020年10～12月に開催された国立歴史民俗博物館企画展「性差（ジェンダー）の日本史」に、2万人以上が訪れたことは記憶に新しい。横山氏は、同企画展カタログ（2020）、『新書版 性差の日本史』（インターナショナル新書、2021）をはじめ、日本近世史・ジェンダー史の専門家として、これまで数々の著書・共著書・論文を発表し、講演を重ねている。代表作として、著書『明治維新と近世身分制の解体』（山川出版社、2005）および『江戸東京の明治維新』（岩波書店、2018）、共著「遊女の「日記」を読む：嘉永二年梅本屋佐吉抱え遊女付け火一件をめぐる」（長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』（岩波書店、2020年））があげられ、最近では、本報告書でふれる、雑誌『世界』（2025.08）での論稿「吉原と日本人：性の尊厳にたどり着くまで」や、フランス社会科学高等研究院客員教授としての講演「歴史のなかの女と暴力：日仏の事例から」（日仏会館、2025.10.3）など、目覚ましい活躍を続けている。

近世日本の遊郭研究の第一人者である横山氏が強調するのは、歴史学の方法による本格的な遊廓研究は、ようやく2010年代以降はじまった点である。横山氏によると、遊廓はTVドラマやアニメなどで話題にされ、「吉原は光と闇の世界」、「金さえあれば身分の差なく扱われる解放空間」、「ファッションリーダーが活躍する文化の源」など、さまざまな見方がなされてきた。本講演に先立って寄せられた質問のなかにも、「階層構造・キャリアデザイン・人材育成方法」、「花魁ドリーム」、「遊廓内での格差は運なのか個々人の能力の違いなのか」を問うものや、人身売買状況、近世吉原遊廓と近代の売買春との連続性に関する内容、なかには「大河ドラマやアニメなどでの遊廓・遊女の描き方が表層的で、娯楽作品とはいえ、誤解を招き、特に子どもたちに一方向の先入観を与えるのではないかと懸念を示す質問もあった。近世の遊廓・遊女のイメージは人それぞれ異なり、私たちはその解釈をめぐる、実態を掴み切れず混乱した状況に立たされている。

そこで本講演では、「明らかになってきた遊廓と遊女の姿を「性と社会」の視点からふり返り、その歴史から何を学ぶべきかを考える」という趣旨のもと、寄せられた質問に可能な限り応答する形でお話を伺った。講演内容の構成は、①近世の遊廓、②近世社会と遊廓の関係、③近世遊廓が現代に問うものとは何か、の主に3点である。①では、遊女屋が人身を所有して売春（性売）を強制する人間の商品化（遊女）と、身代金・仕置・文化による精神的支配（序列・競争）を軸とする遊女の管理について、②では、戦争後の秩序化・全国的金融ネットワークへの組み込み・男性集団管理手段の3つの観点から性の道具化と権力による保護について、③では、現代の売買春を取り巻く問題と関連させて、性の売買はサービスの売買なのか、およびドラマ、アニメなど性売買を支える文化の役割とは何か、について考察した。

横山氏の研究の特徴としては、膨大な一次史料にもとづきながら、忠実かつ慎重に歴史を



記述すること、遊女の視点から歴史を捉えることがあげられよう。本講義でも当時の史資料、たとえば喜多川歌麿などによる遊女の絵画、新吉原遊郭の地図、吉原細見図、吉原張見世の写真、局見世の内部図、遊郭をめぐる金融ネットワーク図、非合法業者の営業地一覧表、放火に関する年表、遊客数の統計表、遊女の日記などを提示しながら丁寧に説明されていた。ことに遊女の日記や放火裁判史料の分析については、イギリス史家の長谷川貴彦氏が横山氏の講演「遊女の「日記」を読む：人は、いつ、何を、なぜ書こうと思うのか」（北海道大学大学院研究院，2025.11.29）へのコメントの際に次のように高評価している：「遊女の日記は「書く」行為による主体形成の表れであり、裁判史料は史料を逆なでに読むことで遊女の声の発見につながる。エゴ・ドキュメント（書簡・日記・自伝・回顧録・裁判記録など「一人称」で書かれた史料）研究の模範例である」

本講演でとりわけ印象的だったのは、「吉原細見」と遊女の序列に関する分析である。葛谷重三郎が定型化し、通常年二回出版された「吉原細見」には、吉原のすべての遊女の名が店ごとに揚代金の順で書かれており、「吉原細見」は廓そのものにとっても必須の出版物だった。この「吉原細見」について、横山氏は二つの役割があったと指摘する。第一に、客にとっての便利なガイドブックとしての役割、第二に、遊女と遊女屋の序列化とその可視化である。この序列化と可視化は、競争の組織化を促がした。遊女たちの生活の端々に至るまでその序列が浸透し、遊女たちに廓の秩序を受け入れさせ、順応させるうえで、極めて有効な手段となった。その一例として横山氏は、嘉永二年（1849）に梅本屋という遊女屋で、過酷な待遇に堪えかねた16人の遊女が共謀して放火し、直ちに自首し妓楼主の非道を訴えた事件に着目する。そして、決行の意思を固めるために書かれた誓紙の名前順が「吉原細見」の記載順であったことは、廓への反抗という場においてさえ、序列が遊女たちに深く内面化されていたことを示す、と指摘する（『世界』178-179参照）。「（吉原）文化」は、どのように美しく芸術的であったとしても、廓での過酷な現実のなかで、遊女支配の装置としても機能していく」のだ（『世界』179）。

講演後のアンケートでは、「学術的な知見を得られたことで（吉原）遊郭・遊女・花魁に対するイメージが大きく変わった」といった内容がもっとも多かった。ほか、「遊郭ほど表象と実像の差が甚だしいものはない」、「人身売買を禁じた一方、奉公という形で合法化したことは性産業と国家の密接な関わりの象徴である」、「常に男性中心の世界であると感じた」、「昔」というブラックボックスに入ってしまうものを、当時の規範も含めてきめ細かく検証していくことの重要性を感じた」などの意見・感想が寄せられた。実証研究の成果が遊郭・遊女の過酷な状況への理解を深めさせ、また、今もなお解決されていない売買春や性暴力の問題、性の尊厳と女性の人権確立について考える貴重な機会になった点で、示唆に富む大変有意義な講演であった。



講演する横山氏

近世新吉原遊廓の
実像と現代

TVドラマやアニメなどで話題の遊廓—「吉原は光と闇の世界」、「金さえあれば身分の差なく扱われる解放空間」、はたまた「ファッションリーダーが活躍する文化の源」など、さまざまな見方がなされてきました。しかし、歴史学の方法による本格的な遊廓研究が始まったのは2010年代以降のことです。明らかになってきた遊廓と遊女たちの姿を「性と社会」の視点からふり返り、その歴史から何を学ぶべきかを考えます。

11/17(月)

18:00~20:00 (17:30開場)

※終了時間は前後する可能性があります。

明治大学 駿河台キャンパス
グローバルフロント グローバルホール

登壇者：横山百合子氏

国立歴史民族博物館名誉教授
明治大学文学部ほか兼任講師



東京生まれ、フランス社会科学高等研究院客員教授(2024年3月)、東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程修了。博士(文学)。専門は日本近世史、ジェンダー史。著書に『明治維新と近世身分制の解体』(山川出版社、2005年)、『江戸東京の明治維新』(岩波書店、2018年)、『遊女の「日記」を読む』(長谷川博義編『エゴリトキエソンの歴史学』岩波書店、2020年)他。共著・論文多数。2020年10~12月開催の国立歴史民族博物館企画展「性差(ジェンダー)の日本史」では展示代表を務め、同企画展には2万人以上が訪れた。

コーディネーター：水戸部由枝
(明治大学政治経済学部教授)

高峰修
(明治大学政治経済学部教授)

参加無料・事前登録

下記 URL または QRコードからお申込みください。
<https://forms.office.com/r/yChtgSS5pb>

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
問い合わせ先 gender@meiji.ac.jp

 上映会

上映会

ドキュメンタリー映画『トークバック 沈黙を破る女たち』 —ジェンダー研究と表現実践への挑戦

【登壇者】

坂上 香氏（ドキュメンタリー映画監督）

【略歴】ドキュメンタリー映画監督。大阪市生まれ。高校卒業後に渡米し、ピッツバーグ大学で社会経済開発学の修士号を取得。暴力や犯罪に対するオルタナティブな視点から、『ライフアーズ 終身刑を超えて』『トークバック 沈黙を破る女たち』『プリズン・サークル』などを制作。NPO法人「out of frame」代表。一橋大学客員准教授。

【主催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2025年12月18日（木）18:00～20:30

【会場】明治大学駿河台キャンパス グローバルフロント グローバルホール

【コーディネーター】大島 岳（情報コミュニケーション学部助教）

【来場者数】64名

報告：大島 岳

2025年12月18日、駿河台キャンパス・グローバルフロント内グローバルホールにて、坂上香監督によるドキュメンタリー映画『トークバック 沈黙を破る女たち』の上映およびトークショーを行った。

本作は、サンフランシスコを舞台に、社会の周縁に置かれ、語ることが次第に困難になり、結果として声を奪われてきた女性たちが、演劇ワークショップに参加し、自らの経験を関係の中で語り直していく過程を、長期にわたる取材を通じて記録した作品である。映画が焦点を当てているのは、HIVという単一の出来事ではなく、暴力、依存、貧困、投獄といった複数の経験が重なり合う中で、語ることがいかに困難な条件のもとに置かれてきたのか、そしてその沈黙が関係や時間の積み重なりの中でどのように変容していったのかという点である。

映画では、登場する女性たちが、医学的には治療が進んでいるにもかかわらず、過去の暴力経験や依存、周囲との関係の断絶を抱えたまま、長く沈黙の中で生きてきた状況が描かれ

る。沈黙は個人の性格や意志の問題としてではなく、語ることが新たな危険や不利益を招きかねない社会的条件の中で形成されてきた、生存のための選択として示される。

こうした沈黙の条件に対し、映画は医療と表現という二つの実践が交差する場を描き出す。医療の場だけでは孤立やトラウマに十分に応答できない限界があり、その中で演劇という実践が導入されていく。刑務所内での演劇ワークショップを起点とするこの実践は、沈黙や混乱、ためらいを否定せず、語りへと至るまでの時間と関係を丁寧に組み立てる方法として位置づけられている。

映画は、女性たちがワークショップに集い、身体を動かし、声を出し、詩を書きながら、徐々に自らの経験に触れていく過程を追う。ここで扱われるのは、出来事を整理して説明することではなく、ままならない現実の中で語れなかった状態そのものに留まりながら、他者とともに言葉を探す実践である。そうした過程を経て、女性たちは舞台作品を上演し、観客の前で語る主体として立ち上がる。その語りは、私的な経験の吐露ではなく、沈黙を生み出してきた社会的条件に応答する行為として位置づけられている。本作は、沈黙を破ること自体を目的とするのではなく、沈黙が変容しうる条件を可視化するドキュメンタリーである。

上映後には、坂上香監督によるトークショーが行われた。まず参加者同士の対話の時間が設けられ、隣席の参加者とペアを組み、短い時間ながらも映画を観て感じたことを言葉にする機会が共有された。ここで重視されたのは、考えを整理してまとめることではなく、感じたことをそのまま口にしてみることであった。

続く質疑応答では、本作が長期にわたる取材によって成立した理由として、完成された成果よりも、語りが立ち上がるまでの過程そのものに寄り添い続けることの重要性が語られた。演劇の現場では、沈黙や混乱、身体的な抵抗を含めた長い時間が不可欠であり、それを省略せずに記録すること自体が重要であったという。演劇を個人表現としてではなく、関係の中で声が育っていくプロセスとして捉える視点も示され、他者の語りを聴き、言葉を止め、言い直し、練り直すという反復を通じて、語りが関係の中で形成されていく様相が強調された。

また、取材の過程で直面した困難についても触れられた。登場人物の人生が予期せぬ方向へ進むことや、語りが一度立ち上がった後に再び沈黙へと戻る場面も少なくなかったという。そうした揺れや後退を失敗として切り捨てるのではなく、そのまま引き受け、関係を保ち続けることが、記録者として最も困難であり、同時に重要な課題であったと述べられた。

会場に向けたメッセージとしては、表現を「うまく語ること」や「評価されること」と結びつけない視点の重要性が語られた。即時的な反応や可視的な評価を前提とする環境の中では、語りが切り取られたり、自己管理的に調整されたりしやすい。しかし本作が示しているのは、語ることができなかった経験に留まり、それを他者と共有する条件を時間をかけて探ること自体が、表現の出発点となりうるという点である。



当日は師走の平日夕刻にもかかわらず多様な参加があり、上映後のアンケートには、作品の受容にとどまらず、参加者自身の制作実践に関わる問いも寄せられた。現場で生じるズレや予期せぬ展開をプロセスとして引き受けること、被写体やスタッフとの信頼関係をどのように築くかといった論点が、あらためて共有された。

なお、本上映会とそれを取り巻く実践は、坂上香監督の理論的形成と人生上の選択が結びついた地点に位置している。フェミニズム理論に学びつつ、教育・研究と映像制作を長年にわたって並行してきた経験は、理論を抽象的に保持するのではなく、社会的現実の中で引き受け、実践として問い続ける姿勢として一貫している。作品において沈黙やためらい、後退や中断が切り捨てられることなく記録されているのは、その方法論の表れである。

語りを急がず、関係が変化するまで現場にとどまり続ける長期取材の方法論は、社会的不正義を制度や関係性の配置として捉える問題関心と響き合っている。ただし本作は、理論を映像に当てはめるものではなく、異なる領域で並行して追究されてきた問題意識が、実践の中で交差した結果として理解されるべきである。

以上のように、本上映会は、構造的暴力のもとで社会の周縁に置かれ、語ることが困難になってきた人びとの経験と、参加者自身の立場や経験とを架橋する場となっていた。その過程で立ち上がっていたのは、個人の回復物語や感情的な同一化ではなく、ばらばらで同質ではない人びとが、それでも互いのために立ち上がろうと決め続ける関係性としての連帯であり、他者の経験に触発され、自らもまた構造の一部として無関係ではいられない位置に置かれることを引き受け、関係の中で自己を表現し直していく集合的な力であった。

当事者である彼女たちが語り直しの実践を通して構造的暴力に応答していく過程、そして長期にわたる伴走と記録を通じてそれを可視化しようとするこのドキュメンタリー映画と上映会という実践は、沈黙を生み出す構造に対し、語りと関係がいかに成立しうるかを現実の中で問い直す、極めて動的な実践の場であった。



参加者同士の対話を促す坂上氏



質問に回答する坂上氏（左）と、大島助教（右）

ドキュメンタリー映画

『トークバック 沈黙を破る女たち』上映会

——ジェンダー研究と表現実践への挑戦

映画『トークバック 沈黙を破る女たち』は、社会の周縁に置かれた女性たちが、他者との出会いを通して“自分の声”を見つけ、人生を取り戻していく過程を丹念に記録したドキュメンタリーです。

語りの場をつくることで、個人の声が公共へと開かれていく——その変化の瞬間が、静かな力をもって映し出されています。

本作は、ジェンダー研究が長く取り組んできた構造的不平等やステイグマの問題を、表現 = 実践という次元から問い直します。

監督の坂上香氏は、政治哲学者アイリス・マリオン・ヤングの理論を背景に、映像制作とワークショップの実践を往還させてきました。

ヤングの社会理論を手がかりに、「誰が語り、誰が聴くのか」、そしてその声がどのように社会へ接続されるのかという課題を、映画というメディアの力学と重ねながら考えます。

登壇者：坂上 香氏
(ドキュメンタリー映画監督)

大阪生まれ。高校卒業後に渡米し、ピッツバーグ大学で社会経済開発学の修士号を取得。

暴力や犯罪に対するオルタナティブな視点から、『ライファーズ 終身刑を超えて』『トークバック 沈黙を破る女たち』『プリズン・サークル』などを制作。NPO 法人「out of frame」代表。一橋大学客員准教授。

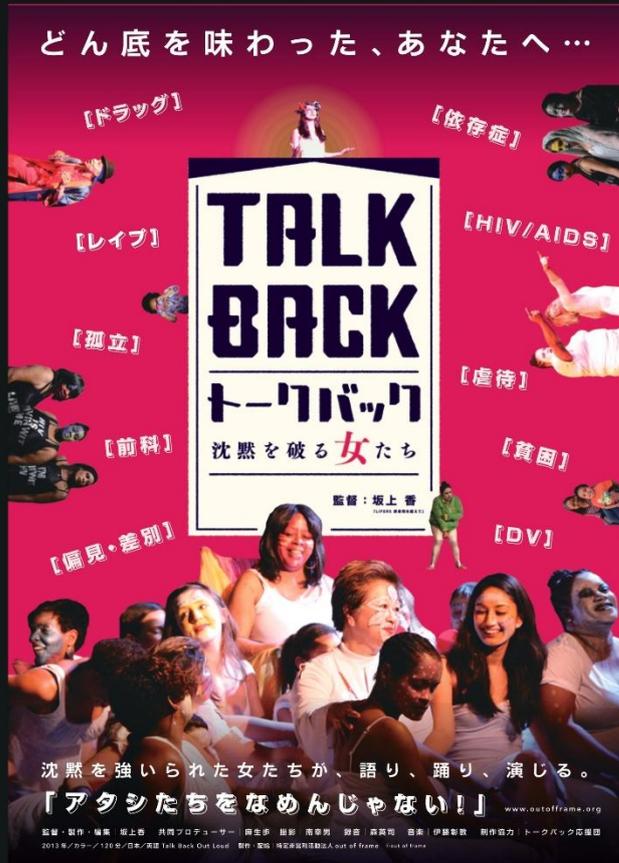
コーディネーター：大島 岳
(情報コミュニケーション学部助教)

参加無料・事前登録



どなたでも参加いただけます。
下記 URL、または
QRコードからお申込みください。

<https://forms.office.com/r/FfBYkGGX4G>



12/18 (木)

18:00~20:30 (17:30開場)

※上映時間：119分

※上映後、監督にご登壇いただけます。

明治大学 駿河台キャンパス
グローバルフロント グローバルホール

主催 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
問い合わせ先 gender@meiji.ac.jp

 研究プロジェクト

A 「企業のダイバーシティ推進の実態調査」

牛尾奈緒美

本研究プロジェクト「企業のダイバーシティ推進の実態調査」は、ダイバーシティ・マネジメントに先進的に取り組む企業・組織を対象に、大規模な質問紙調査および経営者・従業員へのインタビュー調査を実施し、当該取り組みがイノベーション創出や組織パフォーマンスにもたらす効果を実証的に明らかにすることを目的としている。分析にあたっては、多変量解析を用い、ダイバーシティ施策の効果を統計的に検証することを計画しており、日本のみならず海外との比較分析も視野に入れている。

具体的には、従業員個人の働きがい、エンゲージメント、組織コミットメントといった組織的成果に加え、生産性やイノベーション成果など、企業活動における具体的なアウトカムへの影響を検証することを目指している。近年、企業の人的資本経営に対する責任が強く問われるとともに、ガバナンスやコンプライアンスに関する社会的要請も一層高まっている。こうした背景を踏まえ、本研究ではダイバーシティ・マネジメントの推進が、企業の中長期的な価値創造や社会的価値の向上にいかなる影響を及ぼし得るのかを理論的・実証的に検討することを目的としている。

今年度は、上記の研究方針に基づき、人材多様性を積極的に推進し、ダイバーシティを組織成果へと結びつけている組織を「高包摂組織」と概念化し、その形成要因および組織的効果が創出されるメカニズムを分析するための理論的・分析的枠組みの構築に取り組んだ。あわせて、当該フレームワークに基づく大規模質問紙調査の設計を行い、将来的には日本、オーストラリア、マレーシアの三か国比較分析として展開することも視野に入れて準備を進めている。

また、本年度の具体的研究成果として、特許取得を目指す研究組織を対象に、チームのダイバーシティが特許の質に与える影響について実証分析を行い、その成果を学術論文としてまとめることができた。当該論文では、ジェンダー多様性がタスク型多様性（技術知識や専門性の多様性）を高める一方で、ジェンダー多様性それ自体は直接的に発明の質を高めるわけではない、すなわち両者の間には見せかけの相関が存在する可能性があるという仮説を検証した。分析の結果、パフォーマンスの真の決定要因はデモグラフィ型多様性ではなくタスク型多様性であること、そしてジェンダー多様性がタスク型多様性を媒介して間接的に特許の質向上に寄与するという媒介メカニズムが存在することを明らかにした。

本成果は、企業や研究組織におけるダイバーシティ推進を「数の問題」としてではなく、知識・役割・タスクの多様性と結びつけて設計することの重要性を示唆するものであり、今後のダイバーシティ・マネジメント研究および実務の双方に対して意義ある知見を提供するものと考えられる。

B「スポーツ科学をめぐるジェンダー問題の検討」

竹崎一真

本年度、本研究は現代スポーツ科学の発展を社会的に検討し、とりわけジェンダーと権力の観点からその知の構造を分析することを目的として研究を進めた。近年、スポーツ分野では遺伝子解析、生体データの常時取得、ホルモン測定などの技術が急速に導入され、「科学的根拠」に基づくパフォーマンス最適化が強く志向されている。しかし、こうした科学知は単に客観的事実を明らかにするものではなく、身体のカテゴリや規範化を通じて新たな統治の様式を生み出す可能性を孕んでいる。

本年度執筆した第一の論文「スポーツ科学の社会学—スポーツゲノム科学をめぐる試論—」では、トップアスリートの遺伝子解析をめぐる国内外の動向を整理し、スポーツゲノム科学がいかなる権力作用を持つのかを理論的に検討した。とりわけ、遺伝子情報が「才能」や「適性」を予測する知として用いられるとき、そこには能力の個人化やリスクの自己責任化を促す統治的ロジックが作動していることを明らかにした。また、STS（科学技術社会論）やゲノム権力論を参照し、スポーツ科学を批判的に捉える理論的枠組みを提示した。

第二の論文「女子スポーツにおける新たな身体政治としての月経周期トラッキング：「周期的自己」の視点から」では、女子アスリートにおける月経周期トラッキングの導入を事例として、運動生理学領域における性差データの生成とその社会的意味を質的に分析した。インタビュー調査の結果、月経データの可視化は傷害予防やケアの促進といったエンパワメントの契機となる一方で、自己監視や規律化を強める側面を併せ持つことが明らかとなった。ここでは、生理学的データが主体形成や指導関係の再編に深く関与していることが確認された。

これら二本の研究を通じて、スポーツ科学における遺伝子・ホルモン・生体データの利用が、単なる技術的進歩ではなく、ジェンダー秩序や身体のカテゴリと密接に結びついていることを示した。本研究は、スポーツ科学をめぐる知識生産の過程を可視化し、その社会的影響を批判的に検討することで、「フェミニズム・スポーツ科学論」の理論的基盤を深化させる成果を得た。今後は、運動生理学および栄養学における性差研究の制度的展開を精査し、スポーツにおける多様性と公正性の再構築に資する理論的枠組みの構築を目指す。

 業績一覧



*****論文*****

- 跡部千慧, 五十嵐舞, 大島岳, 2025, 「ゲイ雑誌『G-men』にみる HIV とともに生きる〈ポジティブ〉な「労働と生活」像」『国際ジェンダー学会誌』23, pp.61-82.
- 竹崎一真, 2026, 「女子スポーツにおける新たな身体政治としての月経周期トラッキング: 「周期的自己」の視点から」『情報コミュニケーション学研究』第25号.

*****著書*****

- 水戸部由枝, 2026, 「第12講 政治」弓削尚子・兼子歩編『ジェンダーで学ぶ歴史学』世界思想社, pp.200-216.
- 竹崎一真, 2026, 「スポーツ科学の社会学—スポーツゲノム科学をめぐる試論—」石坂友司・下竹亮二・清水諭編著『スポーツと身体文化の社会学』創文企画.
- 竹崎一真, 2025, 「ソーシャルメディアがスポーツを変える?」石岡丈昇『スポーツで社会学する』有斐閣, pp.60-72.
- 竹崎一真, 2025, 「健全な身体に健全な精神は宿らない?」石岡丈昇『スポーツで社会学する』有斐閣, pp.272-295.

*****学会発表・報告*****

- 水戸部由枝, 2025, 「ジェンダー・セクシュアリティから紐解く「ドイツ帝国」」第48回ドイツ現代史学会大会シンポジウム「ドイツ帝国再論: ジェンダー・越境・暴力」2025年9月20日, 駒沢大学.
- 大島岳, 2025, 「高齢期 HIV 陽性者の社会的脆弱性とレジリエンス-交差性理論と地域連携をつなぐ架け橋」, 第39回日本エイズ学会学術集会・総会 2025年12月7日, 熊本城ホール.
- 大島岳, 加藤力也, 福正大輔, 牧原信也, 生島嗣, 2025, 「HIV 陽性者「全国ピアサポート円卓会議」と各地域コミュニティセンターとの協働-全国のコミュニティが語る日本の HIV/エイズ課題と希望の視点-」, 第39回日本エイズ学会学術集会・総会, 2025年12月6日, 熊本城ホール.
- 井上洋士, 高久陽介, 大島岳, 細川陸也, 戸ヶ里泰典, 2025, 「HIV 陽性者参加のフォーカス・グループ・インタビューを通じて得られた, 免疫機能障害による身体障害者手帳制度の認定基準改正と早期治療開始に対する意向と課題」第39回日本エイズ学会学術集会・総会, 2025年12月5日, 熊本城ホール.
- 大島岳, 2025, 「苦しみと向き合う生活史研究の系譜--レジリエンスの社会学に向けて」第98回日本社会学会 2025年11月15日, 一橋大学.
- Oshima, Gaku. 2025. 「Resilience Through Societal Envisioning: Exploring the Impact of HIV/AIDS Activism Among Sexual Minority Communities and Beyond」 ISA Forum of Sociology 2025年7月8日.v6



*****研究プロジェクト*****

牛尾奈緒美, 2025, 「高包摂組織のメカニズムに関する国際比較研究：日・豪・マレーシア
3か国比較」 令和7(2025)年度基盤研究(B)(一般)研究代表者(R7~R11年度)
課題番号 25K00668.

*****講演・メディア出演等*****

牛尾奈緒美, 2025, 「メディア企業におけるジェンダー・ダイバーシティ推進の意義：研究
者・元アナウンサーの視点から」東京銀座ロータリークラブ卓話, 2025年6月11日,
コートヤードマリオット銀座東武ホテル.

牛尾奈緒美, 2025, 特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント：(株)日
本総合研究所 シニアフェロー 翁百合氏・はごろもフーズ株式会社代表取締役社長 小
泉文明氏」企画・ファシリテーター, 2025年10月20日, 15時10分~17時, 明治大学
リバティタワー1156教室.



ジェンダーセンター運営委員一覧

	氏名	所属
委員長	牛尾 奈緒美	情報コミュニケーション学部
副委員長	宮本 真也	情報コミュニケーション学部
学部執行部	坂本 祐太	情報コミュニケーション学部
学内運営委員	施 利平	情報コミュニケーション学部
	竹崎 一真	情報コミュニケーション学部
	大島 岳	情報コミュニケーション学部
学部外運営委員	高峰 修	政治経済学部
	水戸部 由枝	政治経済学部
学外運営委員	出口 剛司	東京大学
	細野 はるみ	情報コミュニケーション学部 名誉教授・元ジェンダーセンター長



ジェンダーセンター運営委員会開催報告

	開催日	場所/開催形式	議題
第1回	6月11日 ～6月17日	メール審議	<ul style="list-style-type: none">・ 前回委員会記録の承認・ 2024年度決算・2025年度予算について・ 「研究プロジェクト計画概要書」の提出について
第2回	7月24日 ～7月31日 ※8月19日 ～8月31日	メール審議 ※②の出欠について	<ul style="list-style-type: none">・ 前回委員会記録の承認・ 研究プロジェクトの承認・ イベント企画について・ その他 <p>① センター長より後期のイベント企画提案について</p> <p>② 第3回運営委員会のオンライン開催予定について</p>
第3回	9月26日	オンライン開催 (Zoom)	<ul style="list-style-type: none">・ 前回委員会記録の承認・ 後期のイベント企画提案について・ 運営委員各位の研究動向等に関する情報交換について・ 細野委員よりセンター設立経緯について・ 次回運営委員会の実施形式及び意見交換会の開催について・ 21階の部屋について

ジェンダーセンター活動記録

15周年記念巻末付録



ジェンダーセンターの活動

2009 年度	ジェンダーセンター準備委員会発足
2009-07-03	第 1 回定例研究会「台湾における『やおい現象』からみるジェンダー意識」
2009-10-07	第 2 回定例研究会「アメリカにおける中絶論争：公的な討議空間の課題」
2009-11-20	第 3 回定例研究会「独日における新しい女性運動とジェンダー政策」
2009-11-27	第 4 回定例研究会「性同一性障害とジェンダー：性別違和を抱える多くの 人々の Q O L 向上をめざして」
2010-03-22	開設記念シンポジウム「労働と承認—ジェンダーから見た世界的正義—」
2010-04-01	ジェンダーセンター発足
2010-06-07	ジェンダー・マネジメント I 「婚活時代から見える女性の生き方」
2010-06-11	第 1 回定例研究会「『6 8 年運動』後の日独における身体・セクシュアリティ をめぐる論争—日本の「優生保護法改悪阻止運動」と西ドイツの妊娠中絶 合法化運動を中心に—」
2010-07-23	第 2 回定例研究会「ジェンダー視点をもった法律家をどう育てるか」
2010-10-22 ～2010-10-23	日独国際シンポジウム「ライフコース選択の臨界点—生き方はどこまで自由に 選べるのか？—」 ※共催
2010-11-05	第 3 回定例研究会「平等から協働へ—〈性別〉と職場のよりよい関係を求め て」
2010-11-15	ワーク・ライフ・バランスをめざす講座「私たちのキャリアデザイン—子育て中も働 き続ける—」第 1 回「私だけのキャリアをデザインする」
2010-11-26	ワーク・ライフ・バランスをめざす講座「私たちのキャリアデザイン—子育て中も働 き続ける—」第 2 回「先輩にきいてみよう」
2010-12-03	第 4 回定例研究会「アフガニスタン民衆レベルのジェンダー意識について」
2011-06-10	第 1 回定例研究会「人口減少社会を生きる：少子化を前提として」
2011-07-22	第 2 回定例研究会「インドの社会と女性たち」
2011-10-14	第 3 回定例研究会「ジェンダーに関する人権問題」
2011-10-24 ～2011-10-25	国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業シンポジ ウム「映像メディアの世界における女性の活躍—アジアの女性映画人のいま： 新たなネットワーク構築」「映像メディアの世界における女性の活躍—メデ ィアで拓いた女性のキャリア：映画とテレビ」
2011-11-04	特別講演会～情報コミュニケーション学部国際交流活動推進の一環として ～「タイの社会・経済状況と女性」
2011-11-28	第 4 回定例研究会「韓国のひとり親家族の現状と政策—教育と福祉の両



面から」

2012-01-16	第5回定例研究会「企業における女性のエンパワメントとポジティブ・アクション—国連グローバル・コンパクトとUN Womenの取組を例に—」
2012-05-18	第1回定例研究会「ジェンダーと医療化：ドイツにおける生殖技術の事例から」
2012-06-08	情コミ卒業生による講演～ジェンダーを学んだ先輩に聞こう～「『女子力』に追われる現代女性」
2012-06-23	シンポジウム「法と文学：〈法〉と〈文学〉の関係を問い直す」※共催
2012-07-02	第2回定例研究会「介護者（ケアラー）への支援はどうあるべきか：ワーク・ケア・ライフ・バランス試論」
2012-07-20	第3回定例研究会「ワークライフバランス，女性の活躍推進と日本経済の活性化」
2012-10-12	国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業 メディアの役割に関するシンポジウム「メディアと男女共同参画：メディアの可能性を探って」
2012-11-09	第4回定例研究会「教育する父親の時代？：ジェンダーと階層をめぐる家庭教育のポリティクス」
2013-03-21 ～2013-03-24	国際学術交流事業ジェンダーフォーラム1 アジア・太平洋ジェンダー研究学会「ジェンダー公正—アジア・太平洋地域における理論・実践・政策」（於・インド）
2013-05-21	第1回定例研究会「人の移動・身体・ジェンダー ～トランスナショナルな卵子提供のフェミニスト分析」
2013-06-14	ドキュメンタリー映画「カタロウガン！ロウたちに正義を！」上映会
2013-10-11	第2回定例研究会「国際比較のなかの結婚と女性労働」
2013-10-16	第3回定例研究会「ジェンダー間の機会平等へのあらたな道程—男女平等は世紀の課題！」
2013-11-19	第4回定例研究会「オーストラリアのスポーツに見るジェンダーとセクシュアリティ—ヘゲモニー・抵抗・変化」
2013-11-26	第5回定例研究会「ジェンダー・ハーモニー：インドおよびネパール固有文化の視点から見た男女間の調和的關係」
2013-12-13	特別講演会「テクスチュアル・ハラスメント」
2014-05-30	資料映像上映会「女性法曹界の道を拓いた人々—明治大学専門部女子部の足跡—」
2014-07-18	特別講演会「近代社会の再封建化：社会構造・ジェンダー・経済」
2014-07-21	特別講演会「ジェンダーの脱植民地化を目指して—世界規模で考える男性性，女性性，ジェンダー関係」
2014-11-03 ～2014-11-05	国際学術交流事業ジェンダーフォーラム2 学際シンポジウム「社会・文化的多様性のレンズを通じた知の構築」（於・タ



イ)

2014-12-16	映画「少女と夏の終わり」上映会+座談会
2015-01-21	田中・内藤合同ゼミ研究発表会「『アナ雪』現象を読み解く！」
2015-04-22	第1回定例研究会「日本における子どもと子ども像の歴史—江戸時代を中心として—」
2015-06-05	第2回定例研究会「『おたく』とジェンダー」
2015-11-06 ~2015-11-07	国際学術交流事業ジェンダーフォーラム3 明治大学国際シンポジウム「学術分野の男女共同参画と多様性」（於・明治大学） ※共催
2015-11-27	映画「PHD Movie 1&2」上映会
2015-12-07 ~2015-12-11	学生企画イベント「MEIJI ALLY WEEK~明治大学にLGBT支援者であるA l l yを増やす一週間~」
2016-01-21	第3回定例研究会「フランスの女性誌史—誕生から黄金期そして暗黒時代と転換—」
2016-05-25	第1回定例研究会「摂食障害からの回復—臨床社会学の観点から—」
2016-06-21	ドキュメンタリー映画「ちづる」上映会
2016-11-15	映画「ハンズ・オブ・ラヴ 手のひらの勇気」上映会&トークセッション
2016-11-23	第2回定例研究会「メインストリーム文化とLGBT」
2016-12-08	女性研究者研究活動支援事業総括シンポジウム「Life Sharing~共に前へ~」 ※共催
2017-06-08	第1回定例研究会「インターセクショナリティ, 言語, ジェンダー移行—在英スペイン人トランス男性のライフストーリー—」
2017-07-07	第2回定例研究会「スポーツ・メガイブの政治学」
2017-10-06	学生相談室主催「『暗黙の了解』ってアリ? ~お互いを尊重する「性」とは~」 ※共催
2017-10-27	第3回定例研究会「『主婦の友』にみる日本型恋愛イデオロギーの固有性と変容」
2017-11-01 ~2017-11-02	国際学術交流事業ジェンダーフォーラム4 国際シンポジウム「都市空間とジェンダー—アジア・太平洋地域の都市空間でのジェンダー、周縁化と公平性の探求—」（於・インド）
2017-11-22	特別講演会「ジェンダー平等と持続可能な開発目標（SDGs）—インドの経験から」
2017-11-30	第4回定例研究会「LGBTをめぐるジェンダー表象/構築」
2017-12-07 ~2017-12-08	学生企画イベント「MEIJI ALLY WEEK 2017—明治大学からLGBTの「味方」= A l l yを増やす1週間—」
2018-04-30	シンポジウム「SOGIは今? ~歴史と国際からみる今後~」 ※共催



2018-05-08 ～2018-05-10	学国際連携本部英国研究イベント（連続セミナー）「Brexit とイギリス、そして、ヨーロッパ人権法」 ※共催
2018-06-22	舞台映像『幸福な職場』上映会・講演会
2018-06-27	映画『カランコエの花』特別上映会・トークイベント
2018-11-16	「同意ワークショップ～お互いを尊重する「性」のコミュニケーションってなんだろう？～」
2018-11-23	アカデミックフェス 2018「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」講演+シンポジウム ※共催
2018-12-12 ・2018-12-19	学生企画「L G B T s & A L L Y 交流会」（2日間）
2019-01-16	第1回定例研究会「生殖の当事者とは誰か？」
2019-03-19 ～2019-03-23	国際学術交流事業ジェンダーフォーラム5 第12回リサーチ・カンファレンス特別セッション「デジタル時代におけるメディアと情報」（於・タイ）
2019-06-04	学生企画：映画『ウリハッキョ』上映会+トーク「ぶっちゃけ！在日コリアン」
2019-06-17	第1回定例研究会「海外研究者から見た日本の少女文化とジェンダー研究」
2019-09-19	センター開設10周年記念シンポジウム 国際学術交流事業ジェンダーフォーラム6 「21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開：アジアのジェンダー研究」（於・明治大学） ※共催
2019-09-20	センター開設10周年記念シンポジウム 「21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開 パート1：ジェンダー研究の新展開——この10年と今後」
2019-11-14 ～2019-11-15	センター開設10周年記念シンポジウム 「21世紀の多様性と創造性——学術・アート・ファッションにおける新展開 パート2：デジタル社会の多様性と創造性——アートとファッションの新展開」
2019-11-23	アカデミックフェス 2019「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」 ※共催
2020-01-11	「『S O G I の多様性に関する学長共同宣言』+ 1」：成果と課題を議論する ※共催
2020-01-24	明治大学大学院情報コミュニケーション研究科特別講義「広告とジェンダー表象」 ※共催
2020-10-24	オンラインシンポジウム「ジェンダーを巡り変化するメディア」 ※共催
2020-11-17	学生企画「コロナ禍で感じたジェンダーギャップ—大学生は何を感じたか—」
2020-12-16	オンライン特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」
2021-01-18	第1回定例研究会「ファッションとアイデンティティ——ジェンダーやルッキズムの問題を考える」



2021-12-10	オンライン特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」
2021-12-18	オンラインシンポジウム「社会に蔓延するミソジニー」
2022-06-22	特別講義「相模原事件をどう乗り越えるのか—『内なる優生思想』と決別するために」
2022-07-09	講演会「『LGBTQ 勉強会』って何やるの？～演劇・映像制作の現場から考える」 ※共催
2022-11-07	特別講義「社会的コンフリクトとしての持続可能性」
2022-11-17	特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」
2022-12-01	第1回定例研究会「セクシュアル・ヘルスから捉えるジェンダー・セクシュアリティの多様性と不平等—30年の直接支援の現場から」
2022-12-13	特別講義「アイドルから考える『フェムテック』—若年女性の健康管理とそのテクノロジー化をめぐる—」
2023-10-23	特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」
2023-11-09	特別講義「ファッションにおける失敗—ジェンダー、そしてデザインの否定芸術」
2024-01-18	オンラインシンポジウム「科学の世界をフェミニズムがひらく？—フェミニズム科学論の可能性と課題—」
2024-05-30	資料映像上映会+トークイベント『女性法曹界の道を拓いた人々—明治大学専門部女子部の足跡』
2024-06-27	シンポジウム「『違和感』から始まるジェンダー表現—アートディレクター、メディア制作、身体パフォーマンスをとおして』
2024-10-28	特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」
2025-10-20	特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」
2025-11-17	特別講義『近世新吉原遊廓の実像と現代』
2025-12-18	上映会「ドキュメンタリー映画『トークバック 沈黙を破る女たち』—ジェンダー研究と表現実践への挑戦」





研究プロジェクト一覧

年度	研究者	研究テーマ
2010	牛尾奈緒美	多様な人材の力を生かす企業におけるリーダーシップ
	吉田恵子	イギリス男女同一賃金法に見る女性労働
	水戸部由枝／出口剛司	戦後ドイツにおける公共性とジェンダー
2011	堀口悦子／吉田恵子／武田政明／平川景子／長沼秀明／岡山礼子	女性専門職の過去・現在・未来
	牛尾奈緒美	多様な人材の力を生かす企業におけるリーダーシップ
	吉田恵子	イギリス男女同一賃金法に見る女性労働
	水戸部由枝／出口剛司	戦後ドイツにおける公共性とジェンダー
2012	吉田恵子／細野はるみ／武田政明／平川景子／長沼秀明／岡山礼子	女性専門職の過去・現在・未来
	牛尾奈緒美	多様な人材の力を生かす企業におけるリーダーシップ
	水戸部由枝／出口剛司	戦後ドイツにおける公共性とジェンダー
	田中洋美／他（外部の研究者との共同研究）	グローバル化とポスト工業化を背景とする現代日本のライフコース変容
	江下雅之	ギャルママのネットワーキング
	施利平	東アジア社会における家族・親族の変容と女性のあり方
2013	吉田恵子／細野はるみ／武田政明／平川景子／長沼秀明／岡山礼子	女性専門職の過去・現在・未来
	牛尾奈緒美	女性の管理職登用の促進についての研究
	出口剛司／水戸	戦後ドイツにおける公共性とジェンダー



	部由枝／田中洋美	
	田中洋美／他	後期近代における個人化とジェンダー変容
	施利平／他	東アジアにおける世代間関係と家族形成（結婚や出産）との関連
2014	武田政明／吉田恵子／細野はるみ／平川景子／長沼秀明／岡山礼子	女性専門職の過去・現在・未来
	牛尾奈緒美	企業における女性の活躍促進に関する調査研究
	出口剛司／宮本真也／水戸部由枝	戦後ドイツにおける『公共性』とジェンダー
	田中洋美／石田沙織／他	後期近代におけるジェンダー規範の変容と持続
	高峰修／田中洋美	性別二元制を攪乱する女性アスリートの新聞報道分析
	宮本真也／出口剛司	資本主義的近代化における不平等の編成
	2015	武田政明／吉田恵子／細野はるみ／平川景子／長沼秀明／岡山礼子
牛尾奈緒美		企業における女性の活躍推進に関する調査研究
田中洋美		後期近代におけるジェンダー規範の変容と持続
2016	細野はるみ／吉田恵子／平川景子／長沼秀明／岡山礼子／武田政明	女性専門職の過去・現在・未来
	田中洋美／石田沙織	メディアにおける男性身体・女性身体のセクシュアル化
	牛尾奈緒美	組織におけるダイバーシティ推進とその課題
	江下雅之／川端有子	戦後の女性誌がライフスタイルに及ぼした影響



	高馬京子／アメリカ・コーベル	現代フランスと日本のメディア言説によって構築された規範としてのカッブル像の自己/相互表象
2017	田中洋美／石田沙織	現代日本のメディアにおけるジェンダー表象と性規範の形成
	吉田恵子／細野はるみ／平川景子／長沼秀明／岡山礼子／武田政明	女性専門職の過去・現在・未来
	江下雅之／川端有子	女性誌研究会による女性誌の多角的研究
	牛尾奈緒美	組織におけるダイバーシティ推進とその課題
	高馬京子／アメリカ・コーベル	現代フランスと日本のメディア言説によって構築された規範としてのカッブル像の自己/相互表象
2018	田中洋美／石田沙織	現代日本のメディアにおけるジェンダー表象と性規範の形成
	江下雅之／川端有子	少女雑誌の変遷に関する実証的研究
	牛尾奈緒美	組織におけるダイバーシティ・マネジメント
	高馬京子／アメリカ・コーベル	現代フランスと日本のメディア言説によって構築された規範としてのカッブル像の自己/相互表象
2019	牛尾奈緒美	組織におけるダイバーシティ・マネジメント
	江下雅之／高橋香苗	「ヤンキーママ」の互助的ネットワークの実態調査
	高馬京子	デジタルメディア時代において多様化する「規範」的ファッションとそれを通して構築・伝達されるジェンダー像についての考察
	田中洋美	現代メディアとアートにおけるジェンダーとダイバーシティ
2020	牛尾奈緒美	組織におけるダイバーシティ・マネジメント
	高馬京子	オンラインメディア空間における自己表象によるジェンダーとファッション
2021	牛尾奈緒美	企業のダイバーシティ推進の実態調査
	高馬京子	デジタルメディア時代の流行現象を通して形成される規範的ジェンダー像：ファッションメディアにおけるマッチングアプリ利用者として構築されるジェンダー像を事例に
2022	牛尾奈緒美	企業のダイバーシティ推進の実態調査
	高馬京子	ファッションを通して構築されるデジタルアイデンティティとジェンダー表象



	竹崎一真	「フェムテック」をめぐる可能性と花壇に関する予備的調査
2023	牛尾奈緒美	企業のダイバーシティ推進の実態調査
	高馬京子	欧州におけるファッション（服飾流行）とジェンダー表象に関する考察
	竹崎一真	生殖技術の進展と女性アスリートのライフコース変容
	大島岳	ジェンダー・ノンコーフォーミングをめぐるパフォーマンス・アートの電子アーカイブ化
2024	牛尾奈緒美	企業のダイバーシティ推進の実態調査
	大島岳	ジェンダー・ノンコーフォーミングをめぐるパフォーマンス・アートの電子アーカイブ化
2025	牛尾奈緒美	企業のダイバーシティ推進の実態調査
	竹崎一真	スポーツ科学をめぐるジェンダー問題の検討



歴代の委員 ※括弧内の所属は当時

年度	委員長	副委員長	学部内運営委員	学部外運営委員	学外運営委員
2010	吉田恵子	牛尾奈緒美	武田政明 堀口悦子 江下雅之 鈴木健人 竹中克久 波照間永子 山口生史 出口剛司	江島晶子 (法科大学院) 水戸部由枝 (政治経済学部)	
2011	吉田恵子	牛尾奈緒美	武田政明 堀口悦子 江下雅之 鈴木健人 竹中克久 波照間永子 宮本真也 山口生史 田中洋美	平川景子 (文学部) 江島晶子 (法科大学院) 水戸部由枝 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)
2012	細野はるみ	牛尾奈緒美	吉田恵子 武田政明 江下雅之 施 利平 鈴木健人 竹中克久 波照間永子 山口生史 田中洋美	平川景子 (文学部) 江島晶子 (法科大学院) 水戸部由枝 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)
2013	細野はるみ	牛尾奈緒美	吉田恵子 武田政明 施 利平 鈴木健人 竹中克久 波照間永子 山口生史	江島晶子 (法学部) 高峰 修 (政治経済学部) 水戸部由枝 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)



			田中洋美		
2014	細野はるみ	牛尾奈緒美	武田政明 鈴木健人 宮本真也 山口生史 田中洋美 内藤まりこ	高峰 修 (政治経済学部) 水戸部由枝 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)
2015	細野はるみ	牛尾奈緒美	武田政明 鈴木健人 宮本真也 山口生史 田中洋美 内藤まりこ	高峰 修 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)
2016	細野はるみ	田中洋美	牛尾奈緒美 江下雅之 高馬京子 波照間永子 宮本真也 山口生史 田中洋美	高峰 修 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)
2017	細野はるみ	田中洋美	牛尾奈緒美 江下雅之 高馬京子 宮本真也 山口生史	高峰 修 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学) 川端有子 (日本女子大学) 石田沙織 (プロジェクト共同研 究員)
2018	細野はるみ	田中洋美	牛尾奈緒美 江下雅之 高馬京子 施 利平 宮本真也	高峰 修 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学) 川端有子 (日本女子大学) 石田沙織 (プロジェクト共同研 究員)
2019	田中洋美	宮本真也	牛尾奈緒美 江下雅之	高峰 修 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学)



			高馬京子 施 利平	藤本由香里 (国際日本学部)	細野はるみ (名誉教授)
2020	牛尾奈緒美	宮本真也	江下雅之 高馬京子 施 利平 山内 勇	高峰 修 (政治経済学部) 藤本由香里 (国際日本学部)	出口剛司 (東京大学) 細野はるみ (名誉教授)
2021	牛尾奈緒美	宮本真也	江下雅之 高馬京子 施 利平 山内 勇	高峰 修 (政治経済学部) 藤本 由香里 (国際日本学部)	出口剛司 (東京大学) 細野 はるみ (名誉教授)
2022	牛尾奈緒美	宮本真也	高馬京子 施 利平 島田 剛 竹崎一真	高峰 修 (政治経済学部) 藤本由香里 (国際日本学部)	出口剛司 (東京大学) 細野はるみ (名誉教授)
2023	牛尾奈緒美	宮本真也	高馬京子 施 利平 島田 剛 竹崎一真 大島 岳	高峰 修 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学) 細野はるみ (名誉教授)
2024	牛尾奈緒美	宮本真也	施 利平 坂本祐太 竹崎一真 大島 岳	高峰 修 (政治経済学部) 水戸部由枝 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学) 細野はるみ (名誉教授)
2025	牛尾奈緒美	宮本真也	施 利平 坂本祐太 竹崎一真 大島 岳	高峰 修 (政治経済学部) 水戸部由枝 (政治経済学部)	出口剛司 (東京大学) 細野はるみ (名誉教授)



編集後記

日本で初めての女性の総理大臣が誕生した年度であったが、早々に「私が首相としてふさわしいか」を国民に問う選挙に打って出て、日本社会は慌ただしい。勝機のある電撃戦が有利と見たのだろうか、物価高、円安、国際情勢など、多くのことについてはなにも見えてこないままの選挙戦である。噂によると、政権与党のメンバーのなかには「ジェンダー」という言葉の公的使用に後ろ向きな面々も含まれているという。まだまだ「ジェンダー」については理解が十分広まっていないことのあらわれかもしれない。食わず嫌いのシニアはおいて、私たちは学生たちとともに次の社会について考えたい。

ジェンダーセンター運営委員・副センター長 宮本 真也

変動する気候、不安定な世界情勢の中、今まさに戦渦や自然災害に巻き込まれている人々にもジェンダーや承認の問題が発生していることは想像に難くありません。冷笑のポーズは本人の意思とは関係なく、分断を煽ることになるでしょう。

ジェンダーセンターの中心となる問題領域「ジェンダー」「ダイバーシティ」「承認」は、それぞれがあらゆる場所、様々な環境で発生しうるテーマです。今回、当センターの活動が15年を越えたのを機にこれまで開催したイベントの一覧を付録にまとめましたが、この三つの問題領域の広さを再認識する作業でもありました。

私たちが学び続けることは、間接的にでも助け合える手段であると思います。今後も当センターの活動によって一人でも多くの方に多様なテーマが認知され、より深く思索するための一助となれば幸いです。

改めまして、今年度開催のイベントにご登壇いただいた皆さま、運営委員の先生方、参加者の皆さまに深く感謝申し上げます。

ジェンダーセンター事務局

 ジェンダーセンター年次報告書 (2025 年度)

- 2026 年 3 月 31 日発行
- 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
- 印刷 株式会社プリントパック